平成２３年度　理学部ＦＤ研修会
２０１１年１１月１６日

なるべくオープンと行動観察

数学科：　幸山 直人

若輩者の私が、理学部ＦＤ研修会という舞台で教育について発表することを引き受けたことに少しだけ後悔しながら、題目である「なるべくオープンと行動観察」について摘要を以下に述べる。

ゆとり世代全盛の今日、理工学系の学生の興味・関心の希薄化や論理的思考能力の低下が顕著となり、様々な所で問題視されるようになって久しい。その当事者である学生も、携帯電話やスマートフォンなどに固執し、外部からの様々な情報や体験を得るチャンスを数多く失っている。このような傾向は、ゆとり世代が終わっても引き続き継続され、一度低下した学力（教員の質を含め）はなかなか元に戻らないと考えられる。もちろん、本学の学生も例外ではなく、その傾向が顕著に現れている。そのため、教員側もＦＤ研修会をはじめ様々な教育改善を試みている。本発表でも「なるべくオープン」と「行動観察」という２つのキーワードに基づいて、教育改善を試みた事例を紹介する。

１つ目の「なるべくオープン」は、授業評価アンケートからのフィールドバックを多分に反映させ、授業の良し悪しを別にして社会に対しても授業内容を全て公開することを念頭においている（外部からの評価を得ることも重要だと考える）。

２つ目の「行動観察」は、授業評価アンケートから得られる情報だけでは不十分なため、とにかく、敵（学生）を知ることが重要だと考えていることにある。学生も入学した当初は、希望や勉強しようという意欲に満ちていたはずである。しかしながら、高校までのパターン化された学習方法とは異なり、大学での学習は論理的に物事を考えることが求められる。多くの学生は、このギャップに悩まされ、そのうち考えることを止めてしまうことに大きな問題があると考えられる。そのためか、学生は、問題に対して必ず解答を求め、少し応用した問題には全く答えられないといった傾向が散見される（勉強しても何をしているのかわからない；他人の解答を写してごまかす；耐え切れなくなって授業から逃げる；諦める）。そして、これらに起因することが授業批判の大半である。最終的には、単位（成績）に執着し、卒業することだけが主目的になってしまうのである。これらを改善するのは至難の業であるが、学生をつぶさに観察し、興味・関心や論理的思考能力を改善できればと思っている（入学して最初の授業が最も重要だと考える；入学当初のモチベーションを維持することが重要である；クラスを先導する学生の育成が重要である）。

最後に、教育という難しい問題ではあるが、学生諸君には成績に執着するのではなく、先ずは「自らの手を動かし、自らの頭で考える」という習慣を身につけてほしいと切に願って、締め括らせていただく。